平成２６年度スーパーグローバルハイスクール構想の概要

<table>
<tr><td>指定期間</td><td>ふりがな</td><td colspan="4">にしやまとがくえんちゅうがっこうこうとうがっこう</td><td rowspan="2">②所在都道府県</td><td rowspan="2">奈良県</td></tr>
<tr><td>26～30</td><td>①　学校名</td><td colspan="4">学校法人西大和学園
西大和学園中学校高等学校</td></tr>
<tr><td rowspan="4">③対象学科名</td><td colspan="5">④対象とする生徒数</td><td colspan="2">⑤学校全体の規模</td></tr>
<tr><td>１年</td><td>２年</td><td>３年</td><td>４年</td><td>計</td><td colspan="2" rowspan="3">931</td></tr>
<tr><td>中学校</td><td>219</td><td>192</td><td>220</td><td></td><td>631</td></tr>
<tr><td>高等学校
普通科</td><td>100</td><td>100</td><td>100</td><td></td><td>300</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑥研究開発構想名</td><td colspan="6">地球規模の課題に挑戦できるグローバルビジネスリーダーの育成</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑦研究開発の概要</td><td colspan="6">・貧困問題の原因を究明し、その解決のために「日本の強み」を探究する。
・企業リソースを活用したその国に相応しい貧困問題の解決策を提案する。
・貧困問題に関する文献や論文等を読み、その新提案の有用性と実行性を相互検証する。
以上の取組で、グローバルビジネスリーダーを育成する教育課程と指導法の研究開発を行う。</td></tr>
<tr><td>⑧研究開発の内容等</td><td>⑧-1全体</td><td colspan="6">(1) 目的・目標
世界の貧困問題の解決策を提案することにより国際社会に貢献できるグローバルビジネスリーダーに必要な知識、スキル、マインドを習得させる教育課程及び指導法を開発する。
(2) 現状の分析と研究開発の仮説
本校は、「次代を担う高い理想と豊かな人間性を持ったリーダーの育成」を教育目標に掲げ、探究型学習として中学校の卒業研究や高校のSSHサイエンス研究に取り組んできた。その結果、全国屈指の進学実績を収めている。しかしながら、グローバル人材の育成という観点に立てば、さらなる教育内容の充実の必要性を感じる。そこで今回のSGH事業では、新たな探究型教育プログラムとして、地球規模の課題である貧困問題に取り組むことにする。従って、A「貧困の原因究明と日本の役割」、B「貧困問題解決策の提案」、C「新提案の相互検証」の3点を研究開発の課題とする。
A「貧困の原因究明と日本の役割」
原因を究明し解決に向けて取り組むためには、当事国の人々とコミュニケーションをとり、相互理解を深めて信頼関係を築いた上で、未来の理想とする姿を共有しなければならない。また日本の果たすべき役割を考えるためには、日本の技術や伝統文化を見つめ直し、「日本の強み」を探究する必要がある。
B「貧困問題解決策の提案」
地球規模の課題への問題意識と国際貢献への使命感を持つグローバルビジネスリーダーになるためには、「日本の強み」を活かし、各企業のリソースを複合的に活用したビジネス戦略の中でその国に相応しい貧困問題の解決策を提案することが必要である。
C「新提案の相互検証」
専門家の指導の下、貧困問題に関する文献や研究論文をさらに調査・分析をすすめることで、様々な新提案の有用性や実行性を相互に検証し実現に結びつける。
(3) 成果の普及
スーパーグローバル通信(仮称)、研究報告書を発行し生徒及び他の高校等関係機関へ送付する。また、講演会や生徒研究発表会などは広く一般に公開とする。さらにH.P.上で、課題研究の途中経過及び成果を公表する。</td></tr>
</table>

	⑧-2 課題研究	**(1) 課題研究内容** アジア諸国（特にベトナム、カンボジア）の貧困問題を抱える当事国との間で、それぞれの文化等に対する相互理解と信頼関係の構築を図った上で、貧困の原因を究明し、日本の強みを活かしてその国が理想とする解決策を探究する。 **(2) 実施方法・検証評価** A「貧困の原因究明と日本の役割」 大阪ユネスコ協会、白鳳短期大学との連携協力の下、貧困を抱える当事国からの留学生とディスカッションを行う。また、高 1 海外探究プログラムでベトナム、カンボジアの貧困地域を訪れて現地の人と意見交換をする。これにより当事国の文化、習慣、価値観、強みを知り、その上で貧困の現状を理解し、その原因及び理想とする姿を探究する。また、東京大学及びグロービス経営大学院等の協力を得て専門家による講義や教育講演会、グループワークの手法を用いて国際社会で活かせる「日本の強み」を探究する。 具体的には、「SG 研究Ⅰ(貧困の原因究明と日本の役割)」を開講し、上記の内容に取り組む。 検証評価に関しては、その都度アンケート調査を行い、貧困問題や日本の役割についての意識の変容を評価する。また、すべての終了後にレポートを提出させて理解度や意欲を評価する。 B「貧困問題解決策の提案」 「SG 研究Ⅱ」は平成 27 年度から開講する。 一橋大学イノベーション研究センター、企業の CSR 担当者等の協力を得て、国際社会に貢献できるグローバルビジネスリーダーに必要な素養を習得するために、「日本の強み」を活かし、各企業のリソースを複合的に活用したビジネス戦略の中で生徒自らが貧困問題の解決策を提案する。 C「新提案の相互検証」 「SG 研究Ⅲ」は平成 28 年度から開講する。 東京大学 高大連携担当副学長 野城智也先生、東京大学 東洋文化研究所 池本幸生教授をはじめとする先生方からの指導助言の下、貧困問題に関する文献や研究論文を調査・分析し、各グループの様々な新提案の有用性と実行性を相互に検証し、実現に結びつける。 **(3) 必要となる教育課程の特例** **・必要となる教育課程の特例とその適用範囲**　特になし。 **・教育課程の特例に該当しない教育課程の変更** SG 研究Ⅰ」1 単位　1 年　「SG 研究Ⅱ」1 単位　2 年　「SG 研究Ⅲ」1 単位　3 年
	⑧-3 上記以外	**(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価** **(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等** **(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備，教育課程課外の取組内容・実施方法** ・大学や国際機関の協力を得てスーパーグローバル教育講演会を実施する。 ・ベルリッツジャパンのネイティブ講師による会話を中心とした少人数制の特別講座「国際理解」を週 1 回放課後開講する。 ・模擬国連の活動を行い、単なる英語力だけではなく思考力、交渉力も身につける。 ・実技教科(音楽/美術、体育、情報)の授業の一部をネイティブ講師が行う。 ・多彩な海外研修プログラムを行う。 **(4) 幹事校としてのとしての取り組み（該当する場合のみ記入）**　特になし
⑨その他特記事項	特になし。	

ふりがな	がっこうほうじんにしやまとがくえん　にしやまとがくえんちゅうがっこうこうとうがっこう	指定期間	26～30
学校名	学校法人西大和学園　西大和学園中学校高等学校		

平成２６年度スーパーグローバルハイスクール　目標設定シート

１．本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

		24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
a	自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数								
	SGH対象生徒:			人	人	人	人	人	350 人
	SGH対象生徒以外:	人	168 人	人	人	人	人	人	300 人
	目標設定の考え方:現在は、生徒会が中心になって、東日本震災ボランティア活動や地域の清掃ボランチア等に積極的に参加している。今後は、SGH活動が開始され、啓発啓蒙活動を積極的に行う予定ですので、更に活動が活発化することが予想される。従って50名程度は増えると考える。								
b	自主的に留学又は海外研修に行く生徒数								
	SGH対象生徒:			人	人	人	人	人	100人
	SGH対象生徒以外:	98 人	97 人	人	人	人	人	人	100人
	目標設定の考え方:現在実施している希望者対象の海外研修参加者は毎年約100名である。来年度からSGH活動で、新たに海外研修を導入する。その結果、あと30名は増えると予想する。								
c	将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
	SGH対象生徒:			%	%	%	%	%	40%
	SGH対象生徒以外:	%	30%	%	%	%	%	%	30%
	目標設定の考え方:SGH活動に参加する生徒数は、約100名で学年全体の生徒数の30パーセントになるので、SGH活動の生徒がほぼ100%目標が達成できれば3割増しになると考えれる。								
d	公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数								
	SGH対象生徒:			人	人	人	人	人	20人
	SGH対象生徒以外:	人	20人	人	人	人	人	人	20人
	目標設定の考え方:初年度は、SGH活動に参加する生徒は、100名程度であるので、20名程度を目標とする。								
e	卒業時における生徒の４技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合								
	SGH対象生徒:			%	%	%	%	%	100%
	SGH対象生徒以外:	80%	80%	%	%	%	%	%	100%
	目標設定の考え方:2年前から中学3年終了時までに英検2級合格を目標としている。1年後には達成できると考える。								
f	（その他本構想における取組の達成目標）								
	SGH対象生徒:								
	SGH対象生徒以外:								
	目標設定の考え方:								

1’指定4年目以降に検証する成果目標

		24年度	25年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	目標値(30年度)
a	国際化に重点を置く大学 へ進学する生徒の割合								
	SGH対象生徒:			%	%	%	%	%	80%
	SGH対象生徒以外:	65%	65%	%	%	%	%	%	65%
	目標設定の考え方:現在は、理系志望者が多く、学年で320名中の230名程度いるが、そのうち医学部志望者が80名もいるので、国際化に重点を置く大学への進学者は上記の通りである、しかし、SGH活動を通じて、今後は、文科系進学者は増えることが予想できるので、全体の5パーセント程度は、増やすことが可能であると考える。また、SGH活動に参加する生徒は、ほぼ80%は、該当大学へ進学することが予想できる。								
b	海外大学へ進学する生徒の人数								
	SGH対象生徒:			人	人	人	人	人	10 人
	SGH対象生徒以外:	2人	3人	人	人	人	人	人	3 人
	目標設定の考え方:SGH活動に参加する生徒は、初めて卒業するときには、100名中10程度は、進学させたいと考えている。								
c	SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合								
	SGH対象生徒:			%	%	%	%	%	80%
	SGH対象生徒以外:	−	−	%	%	%	%	%	50%
	目標設定の考え方:SGH活動に参加する生徒は、明確な目標をもってグローバルな世界で活躍する人材になると確信しているので、80%は確実に影響を受けると考えている。また、教育講演会等、学年全体に対するSGHの取り組みも計画しているので、SGH活動に参加できない生徒も50%程度は、影響を受けると考える。								
d	大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数								
	SGH対象生徒:			人	人	人	人	人	80人
	SGH対象生徒以外:	−	−	人	人	人	人	人	80人
	目標設定の考え方:SGH活動に参加する生徒は、明確な目標をもってグローバルな世界で活躍する人材になると確信しているので、80名は、留学や海外研修に参加すると考える。								

2．グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）

		24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
a	課題研究に関する国外の研修参加者数	31人	17人	人	人	人	人	人	100人
	目標設定の考え方：現在は、課題研究として、海外研修は実施していないが、次年度より海外探求旅行で課題研究に取り組む。								
b	課題研究に関する国内の研修参加者数	253人	250人	人	人	人	人	人	450人
	目標設定の考え方：現在は、課題研究として、国内研修は実施していないが、次年度から東京での研修を予定している。								
c	課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数	校	2校	校	校	校	校	校	7校
	目標設定の考え方：現在は、課題研究として、連携は行っていないが、次年度より7校程度と連携する予定である。								
d	課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数）	人	121人	人	人	人	人	人	250人
	目標設定の考え方：出張講義やテレビ会議システム等、IT機器を使って、大学や大学生等に多数参加して頂く予定である。								
e	課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数）	人	45人	人	人	人	人	人	100人
	目標設定の考え方：企業との連携は、本校の活動の特色でもあるので約100名は、参画して頂けると考える。								
f	グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数	人	20人	人	人	人	人	人	30人
	目標設定の考え方：現座は、模擬国連や科学のオリンピック等に20名程度は出場しているが、今後は、10名程度（SGH活動参加者の10%程度）は、毎年増やしていきたい。								
g	帰国・外国人生徒の受入れ者数（留学生も含む。）	人	20人	人	人	人	人	人	30人
	目標設定の考え方：SGH活動に取り組むことで、入学希望者は増えることが予想できるので、10名程度増えていくことになる。								
h	先進校としての研究発表回数	回	5回	回	回	回	回	回	10回
	目標設定の考え方：次年度は、中間発表、本番発表、校内発表　計3回を予定している。								
i	外国語によるホームページの整備状況 ○整備されている　△一部整備されている　×整備されていない		○						○
	目標設定の考え方：5年前から整備している。								
j	（その他本構想における取組の具体的指標）								
	目標設定の考え方：								

＜調査の概要について＞

1．生徒を対象とした調査について

	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
全校生徒数（人）	935	931					
SGH対象生徒数							
SGH対象外生徒数							